

徳島大学医学部附属病院MRI - CT装置棟新営地  
(庄・蔵本遺跡)  
埋蔵文化財発掘調査概要報告

1994年8月

徳島大学埋蔵文化財調査委員会  
徳島大学埋蔵文化財調査室

- 1 調査地の名称 庄・蔵本遺跡 (MRI-CT装置棟新営地)
- 2 調査地の所在地 徳島市蔵本町2丁目50番地-1
- 3 調査期間 平成6年2月18日 開始  
3月17日 終了
- 4 調査面積 224m<sup>2</sup>
- 5 調査体制 調査主体 徳島大学埋蔵文化財調査委員会 委員長 武田克之  
調査担当者 徳島大学埋蔵文化財調査室 室長 東 潮  
調査担当 北條芳隆  
調査員 北條ゆうこ
- 6 調査の目的  
徳島大学医学部付属病院MRI-CT装置棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査

#### 7 調査経過

2月18日、重機掘削を開始。造成土の除去作業に入るが、土中には現在使用中の電気・ガス・水道等の埋設管が縦横に走っている。これらを保護しつつ作業を進めねばならなかったため、作業は難航した。21日に重機掘削を終了。翌22日から人力掘削を開始。造成土直下の地層は灰色粘土の堆積であるが、この土質は粘性が強く、ひとたび水を含むと重い泥と化してしまうものであった。また既存の埋設管の間を縫う格好で作業を進めねばならなかったため、ベルトコンベアの設置場所には最初から苦慮させられることとなり、効率的な配列をとることは不可能であった。これらふたつの要因に加え、頻繁な湧水と降雨にもたたられたため、作業能率は著しく低下し、調査の最後までこの状態を克服することはできなかった。

23日、調査区南側で土師器壺の口縁部を検出し、この土器の入る暗褐色シルト質粘土層を包含層と認定。24日、調査区北半部の造成土直下において敷石といわゆる「めくら暗渠」と推定される遺構を検出。この遺構の検出作業を開始。28日までにこの遺構の写真撮影と実測を終え、調査区全体を包含層上面まで掘り下げた。3月2日、土師器壺は溝内にあることが判明、この溝をSDO1とする。翌3日、SDO1の全景を写真撮影した後、周囲の遺構検出を開始。溝の北側全体には洪水砂の堆積が広がることを確認した。SDO1の掘り下げは9日までに終え、10日、調査区全体の写真撮影を実施。ただちに実測作業に入る。14日、調査区の周囲に

幅1mのトレンチを設け、下層の状況確認を行う。灰色粘土が地表下2m付近まで堆積し、下層に包含層は認められないことが判明。15日、人力掘削作業を終了、機材の撤収と平行して調査区周囲の土層断面図の作成、および土壌サンプルの採取作業を開始。16日に実測作業を終了。17日、調査区の中央部に試掘トレンチを設け、再度重機掘削を実施。下層に遺物包含層を認めないことを再度確認し、調査を完了した。

## 8 検出遺構

### ①「めくら暗渠」状遺構

造成土直下に堆積する暗オリーブ灰色シルト質粘土層上面には、結晶片岩製の板状石材が広い範囲にわたって敷き詰められ、その下方にはいわゆる「めくら暗渠」状の施設が設けられていることを確認した。この遺構は東西に延びる溝状の掘り込みであったと推定され、北半部で2列、南半部で3列を検出した。各列は3m前後のほぼ等間隔で併走しているが、北半部では溝内に拳大の円礫を多数置き並べるといった構造であるのに対し、南半部では長い竹竿を5・6本、溝内に束ね置くというものであった。こうした構造の違いは時期差を示すものかもしれない。

層位関係や出土遺物からみて、これらの暗渠施設が構築されたのは遑っても明治期であろうと推定される。旧帝国陸軍が兵舎をこの場所に営み始めた時代に該当するのであるが、こうした施設が設けられていることからみると、明治期にあっても調査地の周囲は低湿地帯であったと考えられ、土地の利用にあたっては排水の問題に悩まされる状況であったことがうかがわれる。

年代的にみると、本遺構自体は調査対象からはずれるものであるが、こうした所見がえられたことは、庄・蔵本遺跡全体の旧地形を復元する上で重要な成果であった。

### ②古墳時代初頭の溝（SD01）

調査区南半部で確認された、幅2.1m、深さ20cmの溝である（図4）。東西に走り、兩岸の傾斜は非常に緩やかで浅い。なおここでは溝全体が一端埋まった後に、再度同じ場所にやや狭い範囲で掘削されたと推定される溝が中央部で検出された。内側の新しい溝の埋土は黒褐色シルト質粘土、外側の古い方の溝の埋土はオリーブ褐色シルト質粘土である。床面のレベルは東側が低く、西側が高いが、埋土の堆積状況からみると、明確な流水形跡は認められない。

オリーブ褐色シルト質土中からは、土師器壺の口縁部が縁を下向きにした状態で発見されたが、これ以外に遺物は検出されなかった。

### ③洪水砂の堆積

調査区の中央部付近で、SDO1が掘削される以前のものと推定される洪水砂の堆積を確認した。堆積は東西に延びる可能性の高いことから、この砂は西側からの流れによって形成されたものと推定する。遺物は発見されなかったが、SDO1以前のさほど年代の離れない時期のものであろうと考えられるので、本調査と平行して実施した図書館地区の調査において確認された弥生時代終末の洪水砂層に対応する可能性は高い。

### 9 出土遺物

出土した遺物は土器類のみで、数量はコンテナ2箱分である。内訳は弥生土器片、土師器片、須恵器片、陶器片であるが、細片がほとんどである。なおSDO1出土の土師器壺(図5)は布留式最古段階の二重口縁壺であり、古墳時代初頭のものである。口縁部径20.2cmをはかる。

### 10 まとめ

庄・蔵本遺跡において、低湿地部分の調査は数回を数えるが、洪水砂の堆積が確認できたのは図書館地区の調査とともに、今回が初めてであった。その年代的位置のおよそも判明したことにより、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての地形的状况の大枠を推定することが可能となった。また古式土師器の出土は、全体に当該時期の遺物が少ない本遺跡にあっては、異彩をはなつ存在である。今後、溝の性格を究明するとともに、古墳時代初頭の本遺跡の地形的状况がいかなるものであったのかを解明していく際の有力な手がかりとなろう。



図1 調査地の位置 (1/2000)

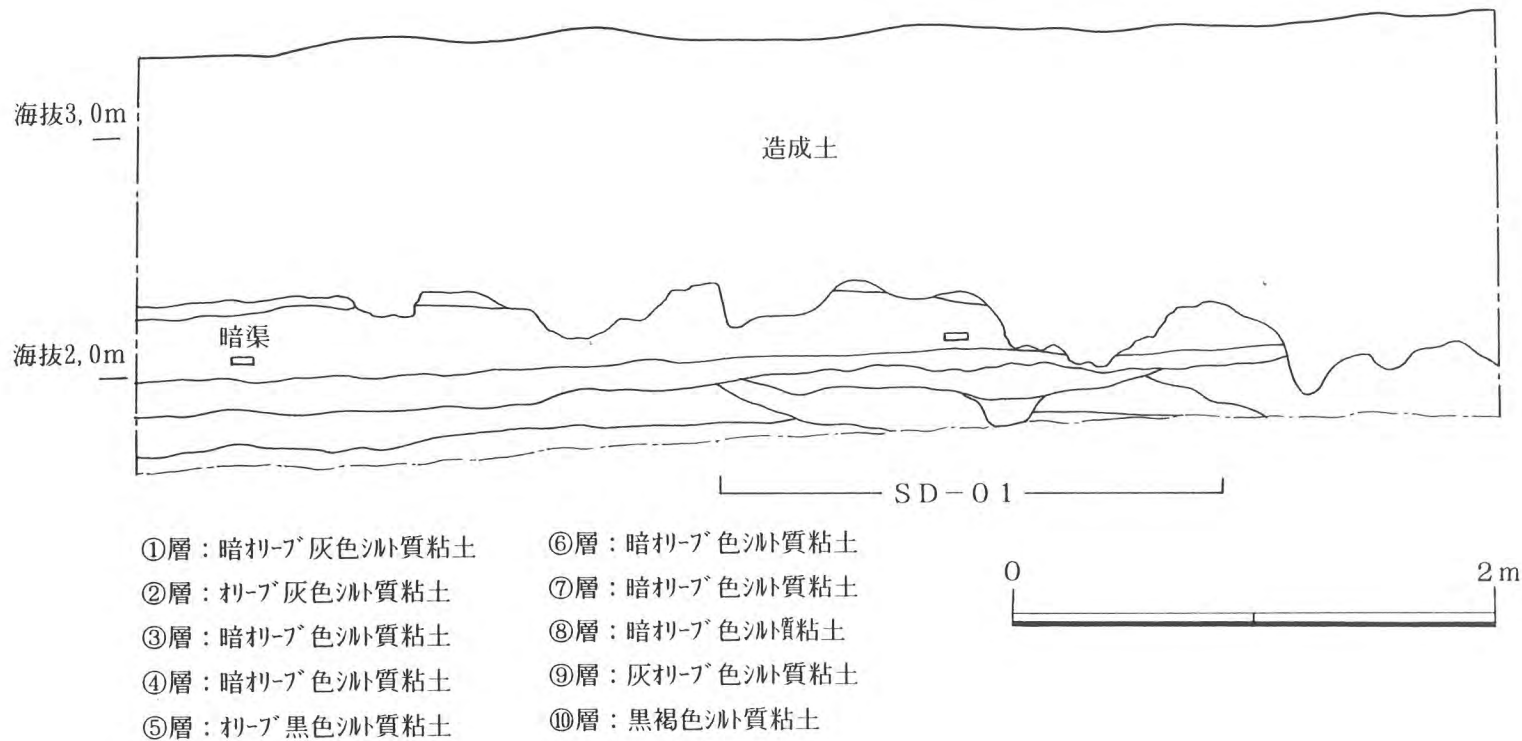


図2 堆積状況（東壁南半部）

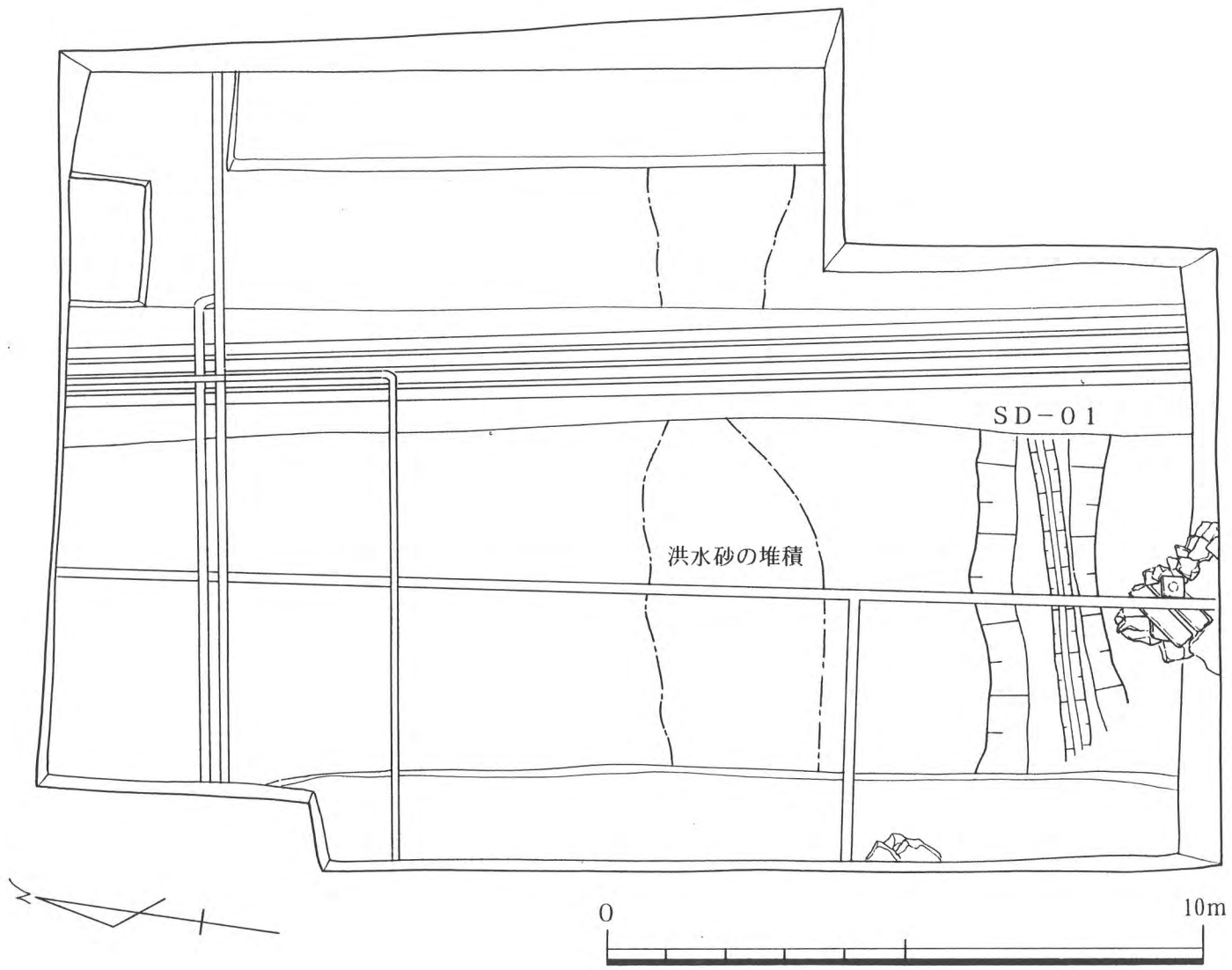


図3 調査区平面図

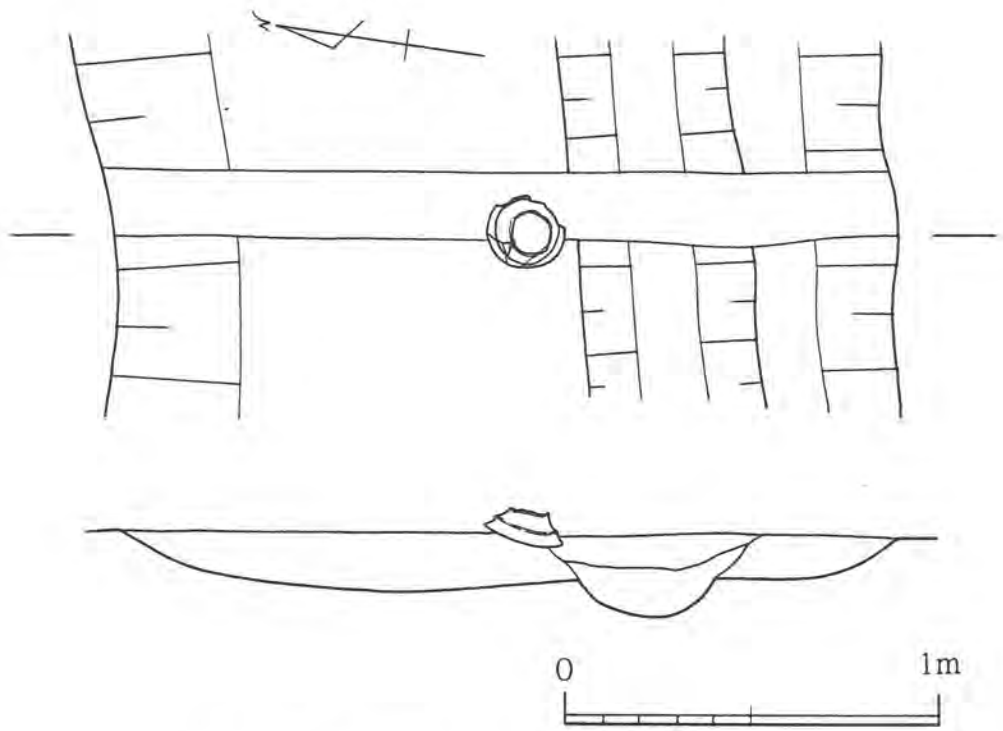


図4 SD-01遺物出土状況

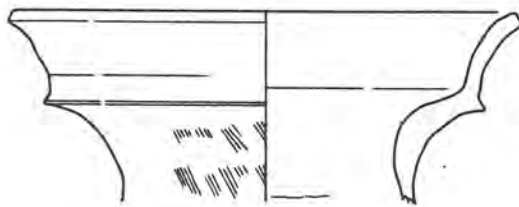
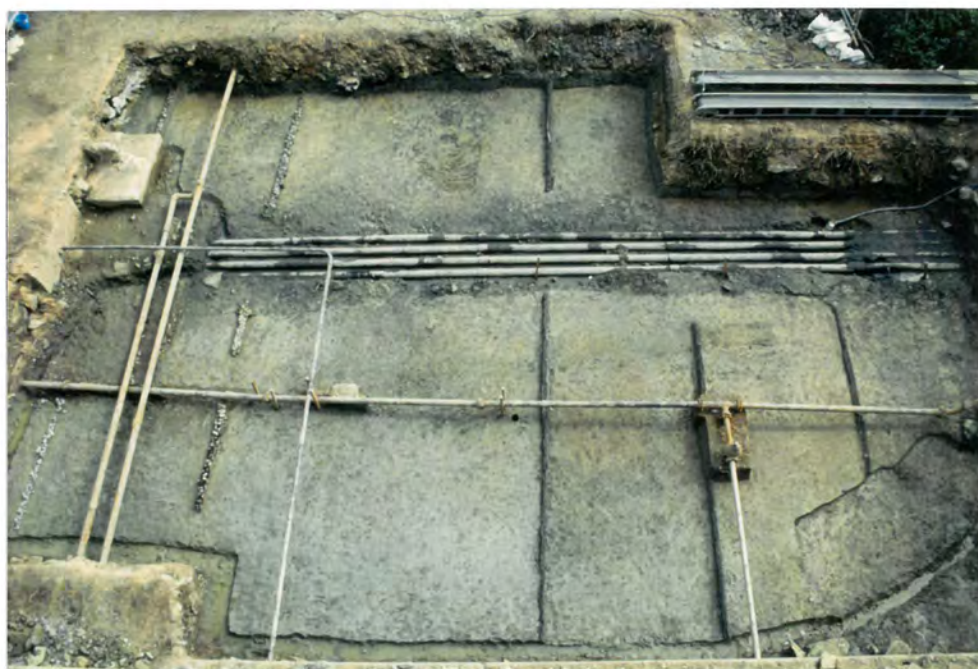


図5 SD-01出土遺物（土師器 壺）（1/3）





調査風景



「めくら暗渠」状遺構検出状況（上が東）



古墳時代初頭の溝（SD01）掘削状況（西から）



土師器壺の出土状態



洪水砂の堆積（壁面最下層の灰色部分）



完掘状況（上が東）